

古材文化

VOL. 69 2006

発行／特定非営利活動法人 古材文化の会（会長 永井規男）

〒605-0981 京都市東山区本町17丁目354番地

湿潤な日本の風土では極力控えるべき

古材の利用を阻むもの、釘・金物の多用に思う

京都大学工学研究科

西澤英和（にしざわ・ひでかず）



民家の保存修理などにかかわってみると、木や竹そして土の相性の良さを実感する。湿気さえなければ、何百年も前の土壁の中の竹や木材が昨日伐ってきたかと思えるほど状態がよい。だから、一見ひどく傷んでいるようでも、仕口をはずせば修理などお手のもの。昔、棟梁から伝統木造で直らないものはないと聞いて驚いたことがあるが、このごろやっとその意味が分かってきた。

これに比べると、現代木造の悩みは深い。建物の傷みが余りに早いのである。

特に問題は釘。1960年代だろうか、伝統的な民家の改修が随分盛んだった時期がある。あのころ、土間に洋風の流しや冷蔵庫が入り、和室を洋間に改造。室内は新建材で仕上げて、外壁はラスモルに変えることが多かった。これらの建物は現在、改修の時期を向かえつつあるが、伝統木造を骨格に戦後改修された建物に接して思うのは、乾式の新建材をつかった部分が建

物の風格を損ね、とりわけ釘を多用した戦後改修の木材の傷みが激しいことである。

釘の頭は大抵腐食して抜けず、釘周囲の木材は錆で傷んでまず使えない。金物も同様。ボルトなどは木材の乾燥収縮に追従しないので、今では接合部は緩み、しかも木材を割り裂いていることが多い。釘の残った古材は、使おうにも刃こぼれが起きるので、せっかくの良材も再利用が難しい。本当にもったいない話である。

筆者は、湿潤な日本の風土では、釘・金物は極力控えるべきだとつくづく思う。釘など金物は、ヒートブリッジを形成しやすく、最近のように冷暖房が普及するとなおさら事態は深刻である。鉄類は結露によって、短期間に錆び、木材の急速な劣化を招く危険性も高まる。果たして、建築後、十年も構造強度が保持できるのだろうかと思うことも多い。

こんな木造家屋が強い地震を受ければどうなるのだろうか？

そういえば先の兵庫県南部地震の際、倒壊した建物から脱出した私の知人は、自身も怪我をしながら、うめき声の聞こえる周囲の木造住宅で下敷きになった人たちを助け出そうと必死になったが、倒壊家屋の釘や金物が剣山のようになって救出を阻み、手の施しようがなかったと語ったことがある。

一方、筆者は以前、百五十年ほど前の民家の解体移築作業の勤労奉仕をしたことがあるが、釘が全く使われていなかったため、地下足袋でも釘を踏み抜くことがなかった。

こう考えると、木造建築の構造強度を確保するのに、釘・金物に頼る必然性はないはずである。確かに釘・金物は手間を省いてはくれるが、金物と木材は本来相性が悪い。

今一度伝統木造の技法に立ち返って、釘や金物には頼らず、古材を活かした先人の叡智に今一度学びたいものである。

CONTENTS

湿潤な日本の風土では極力控えるべき	1
再生建築研究集会のご案内	2
伝統建築保存・活用マネージャー養成講座修了式報告と受講生感想	2
鳥取の建築事情-1 茅葺き民家の調査始まったばかり	3

部会活動報告/会員活動紹介	4, 5
漆塗り教室に参加して/会員活動紹介	6
洗い屋 今江清造氏に聞く	7
イベントガイド	8